

CETRA 2009 受講報告記

河原清志

(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

2009年8月17日から27日にかけてベルギーのルーヴェンにあるルーヴェン・カトリック大学(Katholieke Universiteit Leuven)で開催されたCETRA Doctorial Summer Schoolに日本人大学院生として参加した立場から、このサマースクールの概要を報告する。特にPhD論文に取り組んでいる会員の皆様の参考になれば幸いである。

・CETRAについて:CETRA (Center for Translation Studies)の詳細は武田会員の報告を参照されたい。今回のコーディネーターは同大学のReine Meylaerts。

・ルーヴェン、そして、ルーヴェン・カトリック大学について:ほぼ毎年CETRAの会場となる町、ルーヴェンは歴史が古く、数多くの歴史的建造物が立ち並ぶ。また会場であるルーヴェン・カトリック大学(Katholieke Universiteit Leuven)は1425年創立と歴史が古く、現存するカトリック系大学では世界最古。哲学者エラスムスや神学者ヤンセニウスが教鞭を執った大学としても有名。大学の図書館の時計台から15分に1度、鐘の音が聞こえる中での講義は、重厚な学問の歴史が鳴り響いている印象を受ける。同大学では通訳学・翻訳学が学べるPhDコースが開講されているほか、post-doctoral fellowなどの制度もある。

・CETRA 2009 のプログラムについて:毎日、講義が午前に1回、夕方に1回あるのが原則。そして、講師=学生の1対1によるチュートリアルが30分間。希望する講師別に希望する時間を学生が自由に記入して予約を入れ、研究相談を受けるというシステム。通訳翻訳学の最先端の学者から直接研究指導を受けられるまたとないチャンス。講義とチュートリアルというシステムがなかなか上手く機能していて、充実した時間が持てる。講義もチュートリアルもない空き時間は、図書館や寮の個室で勉強ができ、自由に過ごせる。そして、最後の2日間は、学生による発表が一人30分(20分の発表+10分のQ&A)。2009年の具体的なプログラムは以下の通り。

17日(月)	ブリーフィング、開講式、懇親会 (以下、すべて英語で行われる)
18日(火)	ブリーフィング 講義 (10:30-13:00): Andrew Chesterman “What can translation research learn from Darwin” チュートリアル (14:00-17:00)
19日(水)	チュートリアル (9:00-11:00; 14:00-17:30) 講義 (11:00-13:00): Dirk Delabastita “Status, origin, features: A radically open concept of translation”

	講義 (17:30-19:00): Martha Cheung “Empowerment and total mobilization: Some thoughts on the selection of teaching materials for training translators at the undergraduate level”
20 日(木)	チュートリアル (9:00-11:00; 14:00-17:30) 講義 (11:00-13:00): Christian Schäffner “Translation and norms” 講義 (17:30-19:00): Martha Cheung “Representation, intervention and mediation: A translation anthologist's reflections on the complexities of translating China”
21 日(金)	チュートリアル(9:00-11:00; 14:00-17:30) 講義 (11:00-13:00): Luc van Doorslaer “Spreading stereotypes through media and translation” 講義 (17:30-19:00): Martha Cheung “Reconfiguring translation—the Chinese translation (1)” 夕食会 (19:30-)
週末	オフ
24 日(月)	チュートリアル (9:00-11:00; 14:00-17:30) 講義 (11:00-13:00): Peter Flynn & José Lambert “Fieldwork in translation studies –Why not ask them yourself?” 講義 (17:30-19:00): Martha Cheung “Reconfiguring translation—the Chinese translation (2)”
25 日(火)	チュートリアル(9:00-11:00; 14:00-17:30) 講義 (11:00-13:00): Daniel Gile “Are there core criteria for good scientific work?” 講義 (17:30-19:00): Martha Cheung “The (un)importance of flagging Chineseness: Contextualizing a recurrent theme in contemporary Chinese discourse on translation”
26 日(水)	チュートリアル(9:00-10:00) 学生の発表(10:00-11:00; 14:00-18:00): 計 9 名の発表 講義(11:00-13:00): Yves Gambier “Metalanguage in TS: The case of translation strategy”
27 日(木)	学生の発表(9:00-11:00; 14:00-18:30): 計 12 名の発表 講義(11:00-13:00): Franz Pöchhacker “Research on interpreting: What and how” 夕食会 (19:00-)
28 日(金) 29 日(土)	『Target』誌 20 周年記念国際会議: “The Known Unknowns of Translation Studies”(詳細は武田会員の報告を参照)

・事前課題について:ウェブ上にリーディング・リストが掲載されており、論文・書籍あわせて計 67 本。ダウンロードできるものをプリントアウトしたら、電話帳のような厚さに。事前にすべて読みこなしてレクチャーを受講した、と言いたいが、あまりの多さに、実際は興味のあるもののみを読んで授業に臨むこととなった。

・費用、研究・生活環境について：費用は計€1,300（学費、食費、寮費込み）。食事は月曜～土曜の朝食・昼食の提供と、2度の夕食会がある。寮は各人に個室が与えられる。図書館やパソコンの利用は自由にできるが、パソコンは自分のものを持参したほうが便利である。

・担当講師について：総勢 12 名の講師陣。先生方がお互いに冗談を言い合う和やかな雰囲気の中、学生の側が緊張感を感じる間もなく、ブリーフィングと講義がスタート。先生と学生の間に垣根がなく、自由に意見を言い合える雰囲気だった。

・印象に残った講義について：何と言っても、Andrew Chesterman の“*What can translation research learn from Darwin*” が強烈に印象的だった。ヘルシンキに数十年在住のチェスタマンは、イギリスの伯爵のような風貌で、大変ユーモアのあるイギリス人独特のウィットに富んだ学者。今回の講義は、Darwin の学問の方法論をいかに翻訳学に応用するか、というとても興味深いレクチャー。研究はどこまでやっても、結論を断言できる世界ではなく、I think... という謙虚さが大切で、Darwin の学問に対する情熱に学ぶべきとのこと。またどんな権威者の説であっても疑ってかかり、緻密なデータ収集とその観察・考察を通じて、macro-thinking と micro-thinking とを行き来しながら学問体系を積み上げていくことが大切であると。一つ一つの言葉に重みがあり、重厚感ある話に圧倒された。

是非もう一人挙げたい。主任教授の Martha Cheung。一貫して、中国の翻訳論をめぐる言説を英訳するプロジェクトに関するさまざまな論点を、中国の視点から熱く語った。‘translation’は re-presentation、representation、mediation、intervention であるという話や、翻訳を通してどのように‘China’というものを構築していくか、中国の翻訳における‘the other’とは何か、どのようにして‘Euro-centric’な見方から脱却して独自の翻訳モデルを作るか、という話も出た。地政学上、問題状況が日本と類似しており、共感を覚えた点も多々あると同時に、逆に理論上払拭しきれない‘East vs. West’の対立が鮮明化した面もあり、翻訳及び翻訳学の政治性を痛烈に感じるレクチャーでもあった。

・印象に残ったチュートリアル(個人指導)について：まずは、上記に引き続きチェスタマンのチュートリアルを挙げたい。報告者の研究領域であるメディア翻訳における研究手法のひとつであるインタビューの方法論について質問したところ、focus group approach を利用して、自由形式の討論をインタビュー参加者にやってもらったら面白いインタビュー結果が期待できることと、記事のテキスト分析をした結果を提示して、それについて自由に討論してもらおうのもよいだろう、とのこと。“*Translation in Global News*”を著した Bielsa と Bassnett がいるイギリスの Warwick 大学の研究に着目したらよいこと。Mona Baker の 2006 年の本も参照すること。ここまでが報告者の博士論文関連の指導内容。このように、チェスタマンに限らず、どの講師も学生の具体的な研究計画をふまえた緻密な指導を行っていた。また、同氏の前日のレクチャーや“*Memes of Translation*”の本から刺激を受けて、学問の方法論を確立するやり方について尋ねたところ、Brownlie (2003) などを読むように勧められた。また Benjamins の bibliography からどんどん論文を検索して読むように、とも。あとは、チェスタマンらしい問いが。「君はこの研究によって、結果を記述したいのか、それともその結果をジャーナリストに突きつけて社会を変革したいのか」と。研究の究極の目的論について随分議論した。結論としては、後者の Marxist 的な発想を取るべきかどうか、指導教授と相談したまえ、と冗談交じりにアドバイスを下さった。なかなか面白い御仁である。また、先生の紹介を受けてオマーンの学生から、彼自身が書いた論文を頂く。さらには、サマースクール終了後、わざわざ翻訳をめぐるメタファーについての論文の PDF ファイルを先生ご自身がメールで送って下さった。後進の教育・指導に対する一流の学者の情熱を感じた。

その他あわせて計 11 名の講師からチュートリアルを受けた。どの先生方も皆さん、大変親身に研究相談に乗って下さり、時間を 30 分延長して 1 時間話をして下さった先生方も数名いた。同じ研究テーマに関して、違う立場から異なった意見を頂戴できることは、多角的な視点を得る上で非常に有益であったし、何よりも、共通のテーマをめぐって、第一線の研究者や重鎮と言われている学者と対等に熱く議論ができる空間を 2 週間も楽しめるのは、この CETRA でしか味わえない醍醐味であろう。

・参加した学生について:17 カ国、24 名の参加があった。出身国は、オマーン、イラン、中国、ベルギー、イタリア、ポーランド、韓国、スウェーデン、ルーマニア、ポルトガル、スペイン、インド、フィンランド、キューバ、ナイジェリアなど様ざま。日本からは、報告者を含めて 4 名の参加があった。出会ったその日からフレンドリーな雰囲気、カフェテリアで一緒に食事をしながら研究について話をしたり、仕事と研究との両立の苦労話や、仕事としてやっている通訳のこと、文学翻訳のことなど、多岐にわたる話題を話しながら親睦を深めた。そして、サマースクールが終わったあとも頻りにメールの遣り取りや研究情報の交換などを行う関係ができ、将来の通訳翻訳学を担う研究者の世界的ネットワークができた。

特に親しくなったのは、ナイジェリア出身の、大学で教鞭を執る Adewuni Salawu さん。同国は英語が公用語ではあるが、現地語はハウサ語、イボ語、ヨルバ語など数百言語あり、言語の壁が政治的対立を生んでいる状況を何とか打破したいという国の使命感を背負っての参加。彼の母語であるヨルバ語の口承文学を英語に翻訳する際の戦略などの研究をするために、奨学金を得てルーヴェンに来たという。単に学者として大成したいという動機ではなく、国の平和のために翻訳学を学びたいという気概を持つ彼の姿に、大いに心を打たれた。このように CETRA は、通訳翻訳学を志す多様な背景を持った学生が、いろいろな国の研究者や学生と交流を深め、視野を広げることのできる絶好の場である。

.....

【謝辞】

本稿を書くに当たって、CETRA2009 への参加を勧めて下さった、筆者の指導教授である鳥飼玖美子教授に大変お世話になった。ここに謝辞を表す。

【著者紹介】

河原清志 (KAWAHARA Kiyoshi) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在籍。専門は、通訳翻訳学・認知言語学。

【言及した文献】

- Baker, M. (2006). *Translation and conflict: A narrative account*. London/New York: Routledge.
- Bielsa, E. and Bassnett, S. (2009). *Translation in global news*. London/New York: Routledge.
- Brownlie, S. (2003). Investigating explanations of translational phenomena. *Target* 15(1): 111-152.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.